吉野川歴史探訪　堤防を築いた先人たち　その1

お疲れ様です。別宮川三郎です。６月に「Our よしのがわ」を創刊し、これまでに５回、吉野川の歴史探訪を連載してきました。できるだけ分かりやすい説明に心がけていますが、後から読み返すと「もう少し丁寧に説明すればよかったなぁ」とか反省することばかりです。皆様に気持ちよく読んでいただけるように頑張りますので、引き続きよろしくお願いします。

さて、藩政期においては、吉野川の氾濫を治めるような本格的な堤防はなく、各所に部分的な堤防が築かれていましたが、いずれも小規模なものばかりでした。しかし、それらは、藩や農民たち先人のたゆまぬ努力と工夫により築かれたもので、なかには、命を賭(と)して造られたものもあります。堤防を築いた先人たちの足跡をたどりながら、流域に暮らした人々を守る治水の意義について２回に分けて探訪しましょう。

今回は、藩が主導で築いた「蓬庵堤(ほうあんてい)」、「藤森堤(ふじもりてい)」にスポットをあて、藩の築堤に対する考え方に迫ります。

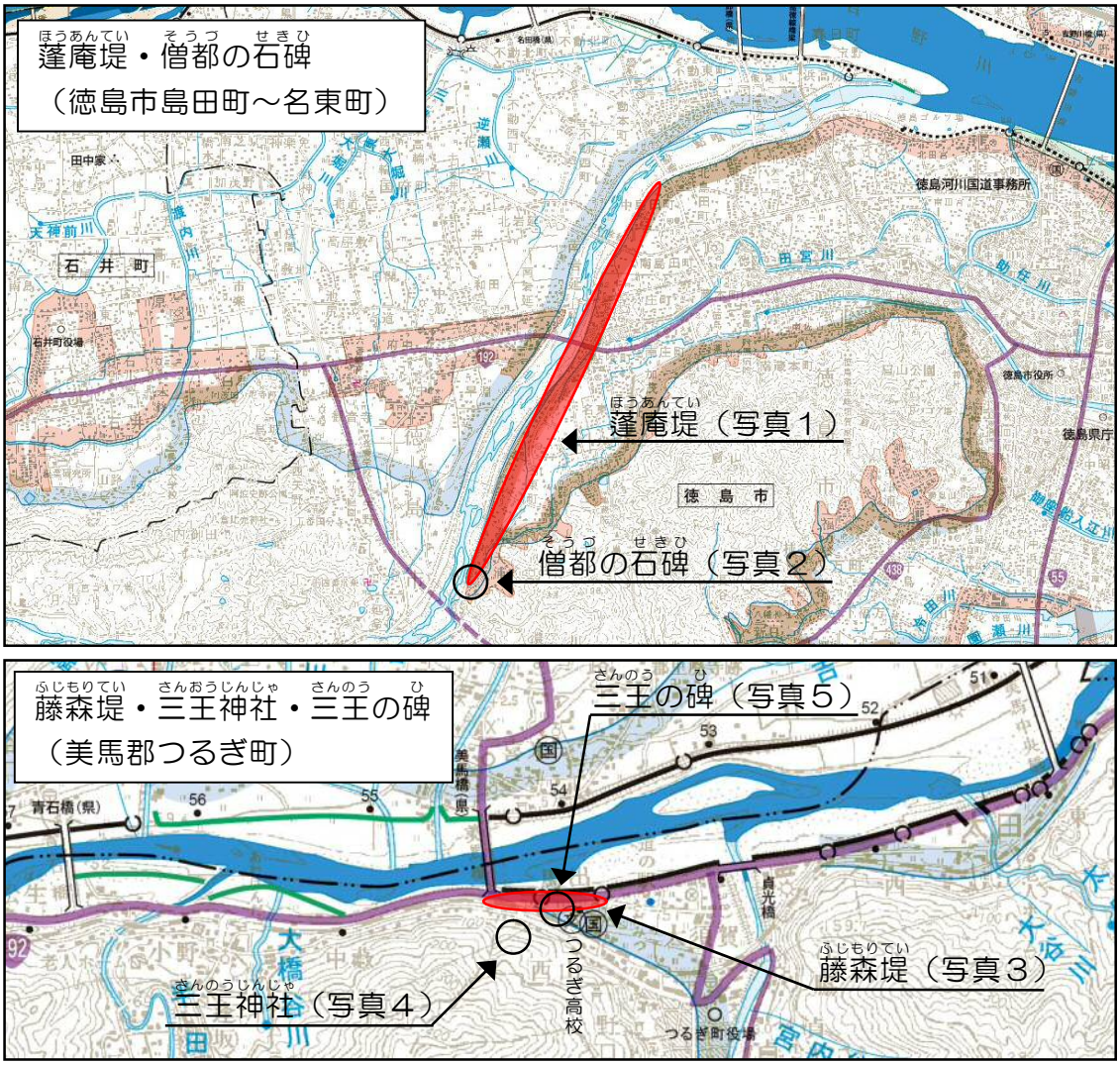

図１　探訪マップ

「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の５万分の１地形図を複製したものである。（承認番号　平 27 四複　第 67 号）」

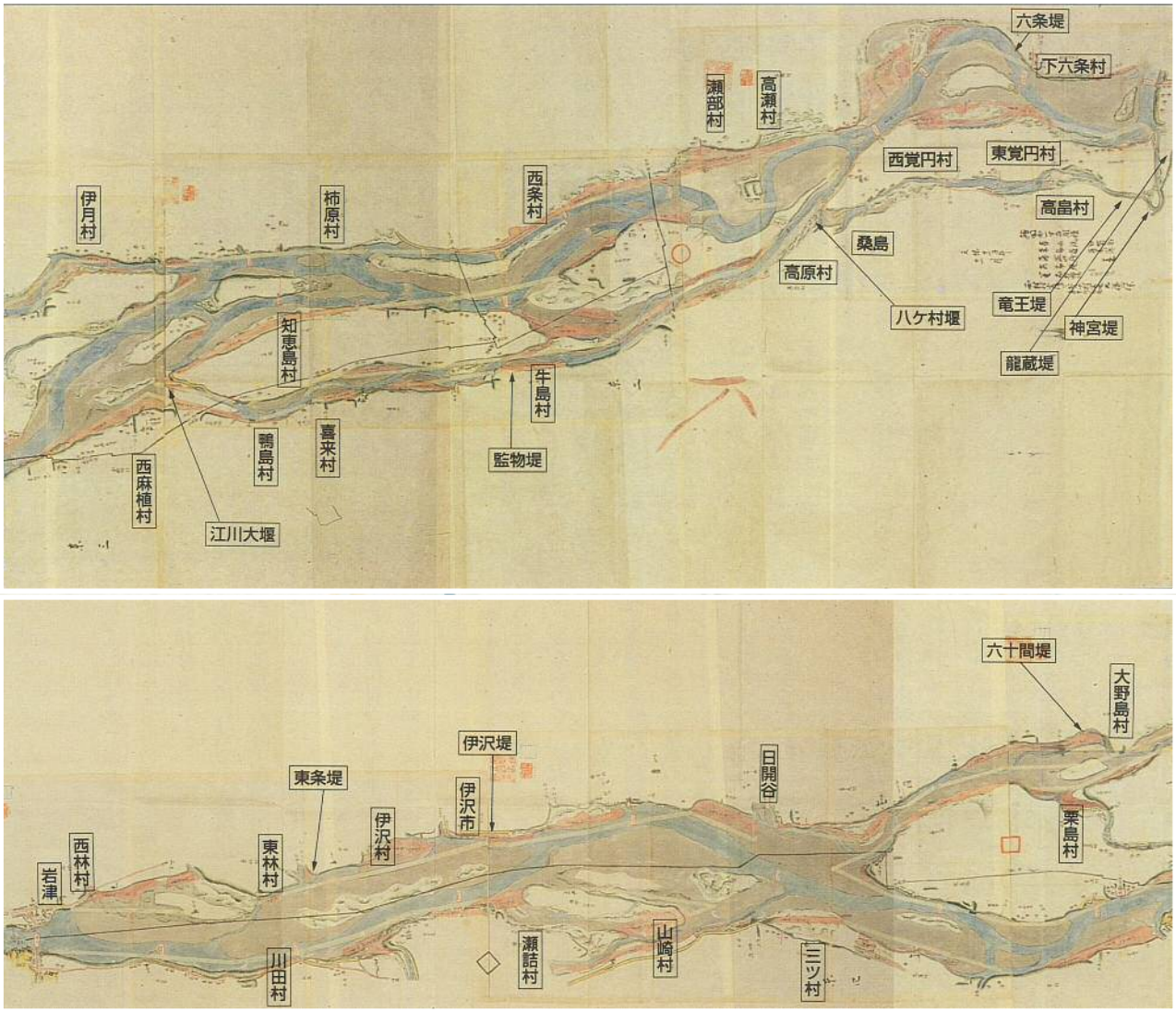

図２　吉野川第一期改修工事以前の旧築堤箇所　※四国三郎物語より
「吉野川絵図」（第十堰～岩津）（天保 11 年（1840））
徳島県立図書館所蔵（ゴシックの囲み文字は編集上加筆したもの）

１．吉野川堤防のはじまり

吉野川の堤防で最も古いものは、15 世紀の中頃、室町時代に細川氏が、吉野川市山川町山崎から川島町学との境に築いた「掻寄堤（かきよせてい）」（土を寄せて盛り上げた簡単な堤防）とされていますが、その実態はよく分かっていません。また、戦国時代に阿波を治めた三好氏や長宗我部元親（ちょうそかべもとちか）がどのような治水を行っていたのかも残念ながら不明です。

その後、藩政期に入ると、ごく一部の地域を守るための堤防が藩や農民たちによって、各所に築かれます。支川の鮎喰川右岸に築かれた「蓬庵堤」、吉野川本川に築かれた、つるぎ高校北側の「藤森堤」は藩の主導で築いたものです。

これに対して、吉野川市鴨島町牛島の「監物堤（けんもつてい）」は農民たちによって築かれたものです。

2．四百年前の旧堤　藩が重視した「蓬庵堤」

蓬庵堤は、徳島藩の藩祖・蜂須賀家政が、天正 14 年(1586 年）に一宮城から徳島城に移った際に、鮎喰川右岸に築いた堤防で、家政が出家したときの法名を蓬庵といったところから、その名があります。徳島の城下町は、吉野川の河口デルタ地帯に位置しており、助任川、福島川、寺島川、新町川を内堀とし、鮎喰川や勝浦川を外堀とする天然の要塞でした。しかし、当時の鮎喰川は、今より東の眉山の麓を流れ、洪水の度に氾濫していたため、その河道を現在の河道に固定するために築かれたのが「蓬庵堤」なのです。

その後、徳島藩随一の土木技術者と言われた伊澤亀三郎、11 代藩主・治昭、13 代藩主・斎裕、14 代藩主・茂韶により修築・延長工事が行われ、藩が城下町を守るため、いかにこの蓬庵堤を重要視したかが伺えます。

鮎喰川右岸沿いに走っている県道神山鮎喰線の東側に、徳島市営バスが通る道路があります。蓬庵堤は、「僧都」のバス停付近から下流へ向かい、名東三丁目、二丁目と行き、国道 192 号を越えて、下鮎喰に至る堤防で高さは 1.2m～1.5m 程度であったようですが、現在は、ほとんどが道路となり、旧堤を忍ぶ面影は残っていません。

【農民から抜擢された徳島藩随一の土木技術者　伊澤亀三郎】

伊澤亀三郎は、寛延3 年(1750)、阿波市伊沢に組頭庄屋の家に生まれます。亀三郎は父の仕事を手伝うかたわら、その合間に独学で土木技術を学び、治水・利水の両面で大きな功績をあげています。また、その行動範囲は生まれ育った伊沢から、河口の松茂町、鮎喰川流域など藩内各地に跨がっています。藩内各地を奔走し地勢を調べ、水路計り、堤防に、用水路にと阿波国中の大工事がある度に参与し監督に携わります。

後に、藩の勧農方まで出世して、徳島藩随一の土木技術者となる亀三郎の功績はまた別の機会に探訪することとして、ここでは蓬庵堤との関わりについて紹介します。

寛政３年(1791)の洪水で鮎喰川堤防が決壊したとき、亀三郎は藩に堤防の修築を進言します。そこで藩から普請裁判役を命じられると、翌年に私財を投じて改修を完成されています。このとき修築した右岸堤防が、藩祖・蜂須賀家政が築いた蓬庵堤であったと言われています。

写真１　蓬庵堤

写真２　僧都の石碑

３．藤森堤（三王堤）を築いた悲劇の代官　原（はら） 喜右衛門（きえもん）

三代藩主・蜂須賀光隆（みつたか）は、貞光島（現在のつるぎ町貞光）を吉野川の氾濫から守り、その地を耕地にするために、貞光代官・原喜右衛門に築堤を命じました。喜右衛門は、初め農民たちに日当を払って「掻寄堤」を築かせていましたが、工事中に洪水で流されたので、表面を玉石で覆うことを試みましたが、それでも水の勢いには勝てず、最後に挑戦したのが石垣の堤防なのです。ところが、その頃には当初の予算を使い果たし私財を使い工事を続けましたが、「どうも資金がないらしい」という噂が拡がり、今度は人夫が思うように集まらなくなりました。

このような中、喜右衛門がとった窮余（きゅうよ）の策は、貞光村七か村の農民たちに労役を強いるものでした。堤防は約 600m、高さ 4.5m 程度であったと言われており、現在の技術から見れば小堤防に過ぎません。しかし、日々の困窮にあえいでいた農民たちにとって、この石積み作業は過酷を極め、飢餓する人、耕地を捨てて逃散する人が出たそうです。

この窮状を見て、村役人の武田助左衛門（たけだすけざえもん）が、代官所に夫役引きを願い出ましたが、この訴えが通じなかったため、藩主・蜂須賀光隆に喜右衛門の非道と村の惨状を直訴したのです。この訴えにより、藩から調査方が差し向けられましたが、武田助左衛門は直訴御法度の掟を破った罪で入牢。そして獄死しました。

一方、貞光代官・原喜右衛門は見積もり違いと不調法の罪で切腹を仰せつけられ、従者二人と自刃しました。

ただ、この堤防工事によって貞光島の耕地が誕生するなど大きな恩恵を受けたことは事実なのです。その後、明治 26 年(1893)には自刃した原喜右衛門ら三名の功績を称えて、三王神社という祠（ほこら）が建てられました。

写真３　藤森堤

写真４　三王神社

写真５　三王の碑

４．徳島藩の治水政策は、藍作のため堤防を築かせなかったのか？

藩政期の堤防は小規模で、洪水時には溢流する部分的なもので、吉野川両岸に大規模で強固な堤防の跡は見当たりません。なぜ、吉野川には大きな堤防が築かれなかったのでしょうか。よく、徳島藩は藍作を優先するために、吉野川の堤防整備には冷淡であったと言われています。その理由は、吉野川が洪水の度に上流から、「流水客土（りゅうすいきゃくど）」と言われる肥えた土を運び、これが藍作に最も適した土となり、藩の財源を豊かにしていたため、藩の方針として堤防を築かせなかったというもので、実際、沿川の市町村史や多くの本にはそう書かれており、これがいわば通説になっています。

しかし、それは本当なのでしょうか？徳島藩が無堤政策をとっていたという確たる証拠はありません。藩が積極的に藍作を奨励し、それによって藩の財政が潤（うるお）ったことは事実ですが、一概に、藍作を保護するため、吉野川に堤防を築かせなかったということは言えないと考える研究者もいます。

当時の領主であれば、できれば吉野川の両岸に連続堤防を築き、最も有利な商品である米をつくるため、水田化をはかりたかったのではないでしょうか。先にあげた「蓬庵堤」の例を見れば、歴代藩主がいかに築堤に努力していたか理解できます。また、「藤森堤」も藩が主導で堤防を築いています。さらに、「藤森堤」の事例でもわかるように、現在の土木技術でもってすれば簡単と思えるような堤防でも、困窮にあえいでいた農民の夫役に頼るありさまで、吉野川の大氾濫を防ぎ得るだけの大堤防を築くことは、徳島藩の財政力・技術力では不可能に近かった、まさに夢物語であったと考える方が事実に即しているのではないかと思います。

今回は、藩政期に築かれた堤防のうち、藩の主導で築かれた「蓬庵堤」、「藤森堤」を探訪しました。次回は、自分たちの地域を守るために住民によって築かれた、築堤に命をかけた新居（にい）嘉藤治（かとうじ）、稲垣監物（いながきけんもつ）について探訪します。